

美術、音楽、演劇など多岐にわたる「芸術」は、人々の心を魅了してやまない。私もその芸術に魅了された1人である。そんな私が日々思うのは、芸術は娯楽として心を潤すだけでなく、1人の人間と「世界」をつなげる架け橋でもあるということだ。

初めて芸術と世界の間を強く感じたのは小学4年生の時。父の転勤でイギリスに引っ越した時だった。現地校に入った私は、毎日英語というわけのわからない言語に囲まれた。数年間英会話を習っていたにもかかわらず、授業内容の理解はおろか、自分の意思さえまともに言葉にできない日々が続いた。毎日泣いた。心細かった。

「私はこの場所でやっていけるのだろうか―」

そう思うことも少なくなかった。そんな時、ある知らせが私の耳に届いた。6歳から習っていたピアノを学校で続けられることになったというのだ。

初回の授業。緊張しながらも私は先生の前で弾いた。私の好きな美しいショパンのワルツを。最後の音を弾き終え、ゆっくりと先生の方を見た。先生の表情で、私の演奏から何かを感じてくれたのだと理解した。音楽を通し、先生と会話できたのである。その後学校のコンサートなど、多くの人の前でピアノを演奏する機会が度々あった。そこでは他の先生、生徒、そしてその保護者や見知らぬ人まで、たくさんの人が直接感想を伝えてくれた。正直驚いたが、とても温かかった。英語がしゃべれなくてもイギリスの人々と交流できた感動は忘れがたく、今も心に強く残っている。ありきたりだが、音楽に国境はないと気づくことができた経験だ。そして音楽は英語がしゃべれなかった幼い私に、日本以外の国で居場所を作る手助けをしてくれたのであった。

日本に帰国してからも、芸術は私を世界旅行へ連れ出した。私は中学生の時から演劇に入れ込んでいる。ハマるとのめり込むタイプで、見た作品に関連することを次々と調べ、ノートにまとめるという習性がある。ミュージカル「アナスタシア」を見た時はロシアへの興味がメラメラと湧き上がり、ロマノフ王朝に関する書籍を読んだり、ネットでロマノフ一家について検索したりした。しまいには主人公アナスタシアが劇中でペルミからペテルブルクまで歩いたと話していたため、その距離を調べた。ペルミからペテルブルクは1830kmで、歩いて約17日かかるという、絶対使わないであろうロシアの知識も得た。他にも大航海時代、スペイン内戦、ルスダン女王、スコット・フィッツジェラルドなど、さまざまな国や人の探究をした。舞台の原作に手を出し、文学を経由して外国にたどり着いたことも多かった。ベースとなった海外文学を読むと各国の考え方の特徴がよりはっきりと浮き彫りになり、大変興味深いのである。一方最近はある韓国ドラマに夢中になり、韓国語を勉強中だ。まだハングルが読めて初歩的な文法が分かる程度の語学力だが、いつか韓国へ留学し、韓国の文化を体感してみたいと思っている。

このように私をさまざまな世界に連れ出した芸術は、私にとって「万華鏡」のような存在である。見せてくれた世界はどれも刺激的だった。歴史の理解や言語習得は難しいが、自分の世界が彩に満ちていくようで興味深い。生涯で住める場所は限られているにも

かかわらず、芸術という万華鏡を覗けば多くの国や文化を知れるなんて実にお得感にあふれていると感じる。私はこれからもいろいろな世界へ旅に出たい。

私の万華鏡は、次にどんな世界を見せてくれるのか。
今からワクワクが止まらない。